

わたしに問わなかった者たちに、わたしは尋ねられ わたしを捜さなかった者たちに、見つけられた

第159号

イザヤ 65:1

平成20年12月26日

神は、私たちが暗やみの圧制から救い出して、愛する御子のご支配の中に移してくださいました。この御子のうちにあつて、私たちは、贖い、すなわち罪の赦しを得ています。御子は、見えない神のかたちであり、造られたすべてのものより、先に生まれた方です。なぜなら、万物は御子にあつて造られたからです。天にあるもの、地にあるもの、見えるもの、また見えないもの、王座も主権も支配も権威も、すべて御子によって造られたのです。御子は、万物よりも先に存在し、万物は御子にあつて成り立っています。また、御子はそのからだである教会のかしらです。御子は初めであり、死者の中から最初に生まれた方です。こうして、ご自身がすべてのことにおいて、第一のものとなられたのです。なぜなら、神はみこころによって、満ち満ちた神の本質を御子のうちに宿らせ、その十字架の血によって平和をつくり、御子によって万物を、ご自分と和解させてくださったからです。地にあるものも天にあるものも、ただ御子によって和解させてくださったのです。あなたがたも、かつては神を離れ、心において敵となつて、悪い行ないの中にあつたのですが、今は神は、御子の肉のからだにおいて、しかもその死によって、あなたがたをご自分と和解させてくださいました。それはあなたがたを、聖く、傷なく、非難されるところのない者として、御前に立たせてくださるためでした。 コロサイ人1:13-22

平成二十年は九月以降、経済界、金融界、実業界において、予期しなかつた全世界的揺さぶり、共同体、社会、国家組織や存在自体が根底から揺るがされる出来事が相次ぎ、大変な危機、混迷の様相を呈して幕を閉じようとしています。他方で、科学界においては、日本の科学者四人が同時にノーベル賞を受賞するという快挙に沸く一幕もありました。

現今の生物学は「生物が生きる」ということを次のように定義しています。生命体が、構成するたんぱく質などの分子の破壊と生成を繰り返している「動的平衡」の状態を、生きている状態であるとみなすものです。体を構成する分子すべての機能が停止してしまう前に、少しずつ分子を壊しながら新しい分子を作っていくというメカニズムが、生命体の中で自然に行われており、人間の場合は、意外にも半年から一年で、体の分子がすべて入れ替わってしまうそうです。生命体は生まれた瞬間から細胞の死が始まり、加齢とともに分子の生成よりも破壊のスピードのほうが速くなり、ついには全細胞死、すなわち、老化による死を迎えると言われていますが、これは神の言葉を裏づけています。エデンの園で最初の人類は、「あなたは、園のどの木からでも思いのまま食べてよい。しかし、善悪の知識の木からは取って食べてはならない。それを取って食べるその時、あなたは必ず死ぬ」と、神から警告されましたが、蛇を通して人を誘惑したサタンに誘われ、神のご命令に反逆した瞬間、確かに、分子レベルの細胞死が始まったのです。神の完全な庇護の下で不死に造られた人間の神への反逆は、その瞬間、「永遠に生きるもの」を「死ぬべきもの」に変え、見えないレベルでの細胞の崩壊が始まり、完全な細胞死に向かう過程、罪の刈り取りの「人生」が始まったのでした。

「ヒトゲノム計画」の全作業が平成十五年に終了し、人間の遺伝子情報がすべて解読できたという今日、いろいろな発見や知識の応用、実用化に向けた開発競争が活発化しているようです。今月は、数ある興味深い研究成果の中から、冒頭に引用した聖句の中の「万物は御子にあつて成り立っています」という御言葉を思い起こさせる「ラミニン」というたんぱく質について考察することにしましょう。「薄い板、層」を意味するラテン語「ラミナ」から名づけられたこの繊維質のたんぱく質は、上皮組織の表皮と真皮の境界部に位置する表皮基底膜の主成分で、厚さ50nmのこの薄い膜が、表皮と真皮とを結びつける役割（強力な細胞接着活性）を果たしているといわれています。このように「ラミニン」は生命体の組織構造を維持するだけでなく、個体発生や癌の湿潤、転移に関わる機能性たんぱく質でもあり、生命体にとって不可欠であることが明らかにされていますが、意義深くも、十字架構造を持つことでも知られているのです。

キリストが十字架上で死んでくださったことにより、罪ある人間が永遠に生きることのできる道が開かれたことを信じる者にとって、生命体の組織構造を結合するという大切な役割を担っているたんぱく質が十字架の形をしているということは、聖書の主張を裏づける新たな情報といえます。キリストの十字架は聖書の真髄、「いのち」に関わる最も重要なテーマを外的に証しするものとして、世界中で語られてきましたが、組織を生かすために不可欠な接着剤の役割を担う十字架構造をしたこの「ラミニン」は、まさに「いのち」が十字架上でキリストの贖いの死によって達成されたことを内的に証しているかのようです。キリストの十字架は、いのちを象徴するパターンですが、驚くべき一貫性で天地の至るところに反映されている完璧で美しい神のデザインが、生命体をつなぎとめているたんぱく質にも反映されていたということは、人間が自然発生によって偶然に存在するようになったのではなく、創造者によって意図的に、目的の下で生み出されたということを明確にしています。神を否定し進化論を唱えたダーウインはよもや、神が外的だけでなく、内的にも——被造物の細胞の中にも——ご自分の御手の跡を残されたとは、考えもしなかつたことでしょう。

冒頭に挙げたくだり、使徒パウロは「**万物は御子にあって成り立っています**」と、「成り立つ」という言葉を用いていますが、これはギリシャ語では、“サネステマイ”、「ともに立つか、ともに倒れる」あるいは、「構成される」と定義される語で、奇しくも、万物の存立が十字架を通して成り立っている、結びつけられていることを洞察しているのです。今日、宇宙の状態は、人間の罪のゆえに、崩壊と消滅に特徴づけられる「死」に至る過程に置かれています。人類の祖アダムとエバが、サタンの指示に従って知識の木の実を食べたことにより、サタンが人の体に受肉し、死の過程が始まったのですが、地の支配者人間の墮落は、無機であれ、有機であれ、すべての組織を破壊に向かわせることになったのです。この過程に終止符が打たれるには、外部からの介入が必要でしたが、それが十字架での犠牲の死を通しての「**御子による神と人との和解**」でした。「和解」と邦訳されているギリシャ語“アポカタラソー”は、あること、あるいは、ある状態を別のこと、別の状態に「完全に変える」ことを意味します。古典ギリシャ語では、他の通貨への両替に用いられた語でしたが、ある文化から別の文化に変えることやすべての敵意を取り除くこと、平和の妨げになるものを一切取り除くことにも用いられることのできた語でした。さらに、太陽、月、星、宇宙に関する地球物理学的メカニズムやエントロピー（世代から世代へと無秩序の増大、消滅へと向かう物理法則）の下に置かれている生物学的メカニズムにも応用されることのできる語なのです。聖書は、この世に相矛盾する二つの物理法則（熱力学第一と第二の法則）が存在する理由を、人間の罪の結果の無秩序化への過程として説明することのできる唯一の書物ですが、罪によって汚され、呪われ、秩序を失ってしまった物事のすべてを修復する大変貌の日「主の日」の劇的到来で、この過程が終わることを告げている書でもあるのです。使徒パウロが「**十字架のことは、滅びに至る人々には愚かであっても、救いを受ける私たちには、神の力です…知者はどこにいるのですか。学者はどこにいるのですか。神は、この世の知恵を愚かなものにされたではありませんか。事実、この世が自分の知恵によって神を知ることがないのは、神の知恵によるのです…ユダヤ人はしるしを要求し、ギリシャ人は知恵を追及します。しかし、私たちは十字架につけられたキリストを宣べ伝えるのです。ユダヤ人にとってはつまずき、異邦人にとっては愚かでしょうが、しかし、ユダヤ人であってもギリシャ人であっても、召された者にとっては、キリストは神の力、神の知恵なのです**」（コリント第一 1:18-24）と誇った「十字架」は、文字通り、この大変貌をこの世にもたらし、確立した手段、メカニズムなのです。

冒頭の『コロサイ人への手紙』の中でパウロは、十字架の血により「**地にあるものも天にあるものも**」神と和解させられたと語っていますが、「ラミニン」の発見は、分子レベルにおいても生命体の修復機能が十字架を思い起こさせるかのように、すでに確立されていることを明らかにしたのです。創造者、絶対的主権者なる神の御命令への反逆により、人間に罪、病、死が入り、人間は神との正しい関係から離れ、サタンに従属する者になりました。神を喜び、神との交わりを楽しむ関係から、神を恐れ、神を避ける「罪人（つみびと）」になってしまった人間に、分子レベルでの細胞の破壊、死が始まったのです。しかし同時に、十字架構造を持つ「ラミニン」が死に定められた体の中で、生きるのに不可欠な接着剤の働きを続けているという発見は、まさに、十字架こそ、死すべき人間、死すべき宇宙に与えられた唯一の「いのちへの手段」であることを物語っているのです。確かに、十字架はすべてのことを激変させたのです。サタンの支配下で、滅びに定められた人間を「永遠のいのち」に結びつけ、「生きるもの」へと逆転させたのです。

「**御子は、見えない神のかたちであり……ただ御子によって和解させてくださったのです**」のくだりは、初代クリスチャンの『詩と賛美と霊の歌』と呼ばれた最も重要なキリスト教教義を織り込んだ賛美歌とみなされているもので、そこには「創造」と「贖い（新創造）」におけるキリストの卓越した働きが表現されています。御子キリストは「**見えない神のかたち**」、「**神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現われ**」（ヘブル人 1:3）、すなわち、神の本質を有し、天地万物の創造に携わられた方であり、同時に「神の人」として受肉（人として地上に後降誕）された方でした。「**万物よりも先に存在**」された御子とは、「時」を含めたこの世の次元の外におられる方であることを指し示しており、「**御子によって造られ、御子のために造られた**」と聖書が主張する、天界の被造物、墮天使の長であるサタンをも含めた天地万物は、当初御子のものでした。しかし、反逆の被造物サタンが、人間をそそのかし、罪に陥らせ、禁断の実を通して自らが人間の体（霊・魂・体から成る人間の一番外側、目に見える部分）に受肉したことにより、人間はサタンの支配下に置かれることになったのです。「**良し**」として造られた「からだ」はサタンの呪いを子々孫々受け継ぎ、「肉」となって人間を誘惑、責めさいなます人間史の始まりでした。

しかし、サタンの神への反逆、誘惑、人間の墮落…すべてを最初から見通しておられた神は、人間との関係を修復する手段として十字架を備えておられたのです。神は十字架上で、肉を着られた（受肉）御子を殺すことによって、サタンの権化「肉」を釘づけにし、呪いの肉体をさらしものにされたのです。三日後に、死んだ御子が甦られたことによってサタンの敗北は決定的になりました。もはや呪いの肉で人間を支配する道は完全に閉ざされたのです。キリストの救いを信じる者には、サタンとは縁のない「永遠に生きる甦りのからだ」が与えられることが確証されたのですから。死から生への甦り、すなわち、「**死者の中から最初に生まれた**」御子の革命的な偉業は、新創造——神との和解による贖い——を画する出来事となりました。キリストが地上のミニストリーで行われたラザロの復活に代表される肉体から肉体への蘇生ではなく、肉体から全く新しい霊の体への甦りなのです。二千年前、十字架によって達成されたこの「贖い」が完成するのは、キリストが再び地上に戻られる再臨のとき「主の日」で、その日は確実に近づいているのです。